



母親の顔

原田成二（東京都）

たしか二十歳のときだったと思う。一人暮らしをしているアパートのチャイムが鳴ったので、対応に出てみると、訪問販売のおばさんが立っていた。化粧品のセールスをしているらしく、男性用化粧品もあるという。

当時、学生だった私は、手が荒れてボロボロだった。理由はハッキリしている。バイトをしていた寿司屋で水仕事をしていたからだ。私は皿洗いのバイトとしてその店に入ったのだが、なぜか親方がひどく私のことを気に入っていた。入社三年目までの職人には一切寿司を握らせないのに、私には、





「寿司の基本は巻物からだ。まずは巻物からやってみろ」

と言ってきたかなかった。私は学生であり、将来、寿司職人になるつもりはなかった。だが、親方の強烈な勧めで、バイトの身分なのに寿司職人見習いのようなことをしていた。

「肌荒れを治すクリームとかありますか？」

私が尋ねると、訪問販売のおばさんは、

「若いのに、ずいぶんと荒れてるねえ」

と言い、効果の高いクリームを勧めてきた。

それにしても荒れ方がひどい。

肌荒れの理由をおばさんが訊いてきたので、私は正直に答えた。皿洗いの学生バイ





トなのに、親方に気に入られて寿司を握っていること。将来、寿司職人になるつもりはないので、困っていること。若い職人さんから「バイトなのに寿司を握っている」と目をつけられ、まいつていること―。

ふんふんとおばさんは聞いていたが、一通り、私の話が終わると、なぜか商売道具の肌荒れクリームをカバンにしまい始めた。

「お兄ちゃん。親方の気持ちを無駄にしたらダメだよ。きっと親方は、今まで色んな職人さんを見てきたと思う。そんな中で、お兄ちゃんは見どころがあると思われたんだよ」

そうかもしれないが―。

「将来、寿司職人になるつもりはなくても、今は親方の気持ちを大事にして、必死に





なって寿司を握りなさい。その経験は、いつか役に立つ」

そして、おばさんはこう続けた。

「あたしは化粧品を売って回るのが仕事だけど、お兄ちゃんには売らないことにする。水仕事でボロボロになるまで働いたその手を、よく見つめなさい。それが頑張った証なんだから」

私は肌荒れクリームを買うつもりだったのだが、おばさんはもう売る気はないようだった。そして、

「若いうちの苦労は決して裏切らないよ。冷たい水仕事も、つらい人間関係も、いつかは慣れてくる。そして、まな板の前に立たせてくれた親方の優しさも、いつか分かる日が来るよ。それまで辛抱して、頑張るんだよ」





と言った。

その顔は、訪問販売をしに来た顔ではなく、我が子を心配する母親のような顔だった。

【令和元年度・優秀賞】

